

趣 旨

戦後の日本史学界のみならず、政治史・経済史学界全般にあてはまることだが、“封建制” Feudalism というキーワードが一時期、非常に威力を振ったことがある。その後、封建制の語は、何故か、いつしか使われなくなり、替って“王権” Kingship の語が多用されるようになった。昭和から平成への代替りの頃(1989年)からその傾向が強まった感じである。日本の研究者一般に、天皇制ということが複雑で難解な概念であるらしい、という認識が広まったことと恐らく関係があるだろう。

編者が国際日本文化研究センターに赴任したのが2004年、その翌2005年度から三ヶ年の計画で、共同研究「王権と都市に関する比較史的研究」を立ち上げた。主として国内の都市史、歴史研究者を中心に、世界各地の王権と都市のあり方を研究しようという趣旨で始められ、2007年度が早くも最終年度になった。

慣例として、この研究所では、共同研究の最終年度に国際研究集会が開催されることになっている。予算その他の制約もあって、今回のシンポジウムは極めて小規模なものとなったが、気鋭の研究者の御参加を得て、充実した発表、討論が行われるものと期待している。都市の歴史は文明とともに始まり、アジア型都市とヨーロッパ型都市に分れるが、ヨーロッパ型都市は、さらに王権的都市と非王権的(共和制的)都市に分れるようである。日本では、古代都市は大陸の、すなわち典型的なアジア型都市の模倣から始まったが、平安中期以降展開する中世都市になると、ヨーロッパ的都市と似通った側面が出てくる。

以上のように、王権のあり方による都市の差異を考えることは、歴史上極めて意義が大きいと思われる。この国際研究集会の議論が何らかの引き金となって、都市の発展の歴史的意味を考えるきっかけとなってくれば、主催者側としては大きな喜びである。今回の研究集会の開催にあたり、宇野隆夫教授・リュッターマン准教授、本研究所研究協力課の方々には多大の尽力を得た。ここに特記して謝意を表したい。

第33回国際研究集会実行委員会委員長
国際日本文化研究センター教授

今谷 明